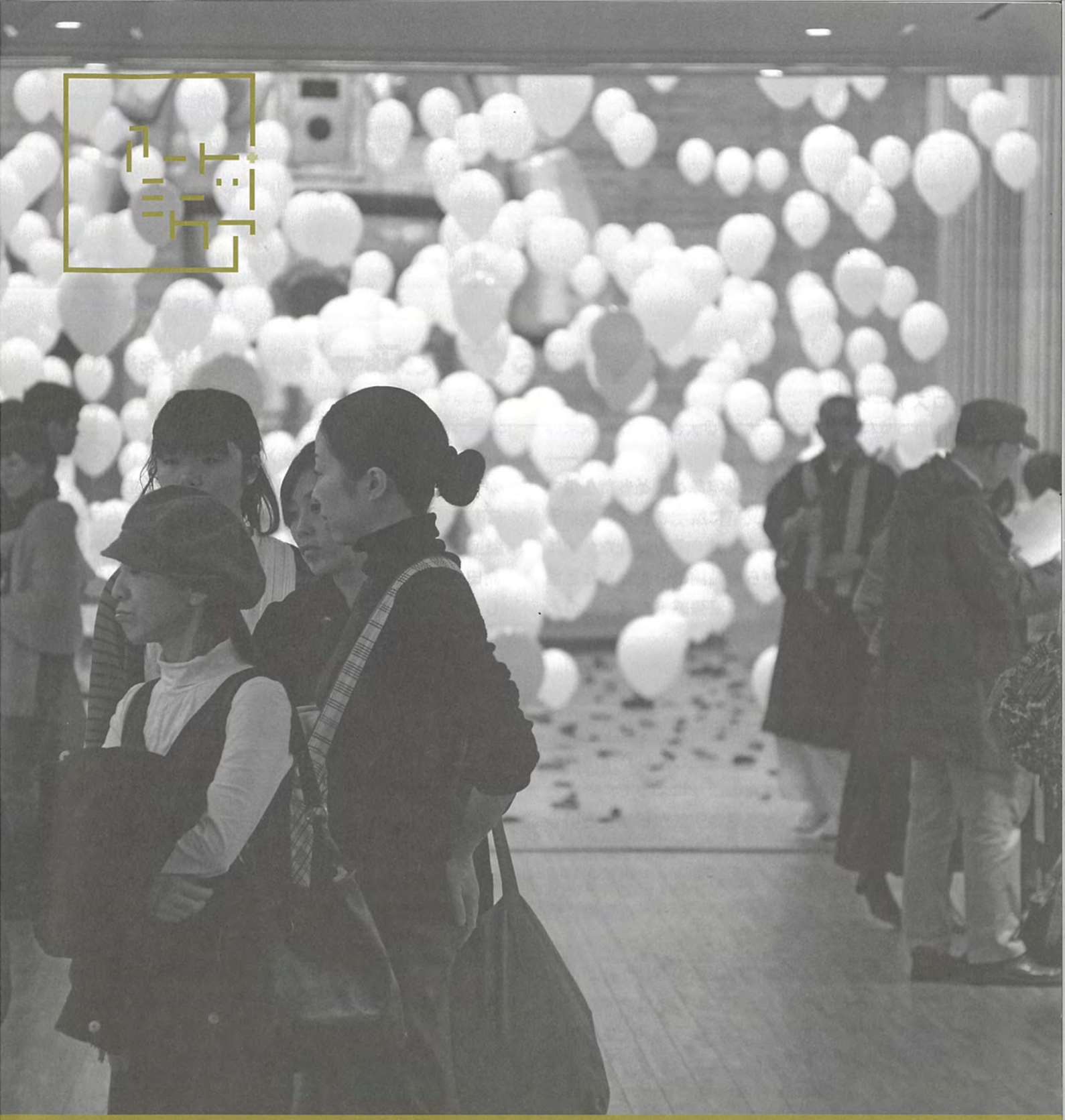

アートミーツケア学会 News+Letter
Vol.9 2012 Winter

CONTENTS

特集 「こども」から考えるケアとアート―― 大震災を経て　2011年度大会報告
中島香織、薮内 都、松永 茜、藤松 紋、中西祐子、長津結一郎、水野哲雄

第4期新規役員紹介

インフォメーション　入会のご案内

Photo:「2011年度京都大会会場」撮影:坂倉杏介

特集　2011年度大会報告

「こども」から考えるケアとアート——大震災を経て

2011 年 11 月 26 日、27 日に京都造形芸術大学 ギャルリ・オーブをメイン会場に、2011 年度大会「『こども』から考えるケアとアート——大震災を経て」を開催しました。25 日に行ったスタディツアーも含め、述べ 250 人を超える方々にご参加いただきました。
多くの人の言葉、思い、考え、表現……が「ミーツ」する場になったのではないかと思います。
大会のメインプログラムであったクロストークと、分科会、スタディツアーの様子を学生によるレポートで振り返ります。

レポート　クロストーク

『こども』から考えるケアとアート——大震災を経て

中島 香織　神戸大学大学院人間発達環境学研究科学生

クロストークの会場には震災のあとこどもたちがつくった、たくさんの作品が見事に展示されていた。そこに集まった多彩な 10 名の登壇者の語りは、たがいに共鳴しあう部分はありながらも結論めいた大きな言葉に回収されることなく、ときに緊張感すら漂うものとなった。

ボールを手にした人が話す、という簡単なルール説明のあとそれぞれ 5 分程度の自己紹介、そしてフリートークへと展開した。震災で親族を亡くした横濱さんや、牧場を閉鎖した菅野さんの語りによって、どことなく落ち着いていなかった会場の空気がピリッと引き締まった。どの人の語りにも多くのトピックが含まれていたが根底に流れていのは、わたしたちの生き方を問い直す姿勢を忘れてはならないという、危機感にも似た思いだった。

震災直後は多くの人が現代の生活のありかたが本当によかったのかどうか考えた。しかし小林さんが歴史学者の言葉を引用して述べていたように「大災害のあとは世の中を根底から創造的に考えなおすための空間がうまれるが、うかうかしているとその場はすぐ閉じてしまう」のだろう。阪神・淡路大震災がおきたころ社会が変わると思ったが案外変わらなかった、という島田さんの発言がそれを裏付けている。また、対話をしよう、震災を語り直そうとしても苦しみの度合いによって階層ができ対話がスムーズに進まない要因になっている、という西村さんの話もあった。現地ではさまざまなレベルでの「苦しみの共同体」ができているのだという。それが良いとか悪いとかいうことではもちろんない。

福島の元酪農家・菅野浪男さん / 撮影：坂倉杏介

菅野さんは、自身が選んだ生き方である農業について、生きる力をつけるのに最もよいと思うと言い、目黒さんは宮沢賢治と井上ひさしに学ぶところがあるのでは、と述べた。また松下さんは僧侶になることで自分は生き延びることができたと吐露した。三人の発言は、連綿とつづく日々の暮らしと表現活動の重なりを異なる言い方で表しているようだった。また、関口さんと坂上さんは自身の活動をまとめた映像を見せ、こどもの表情やふるまい、表現活動をする際の配慮などを説明した。それぞれ活動場所や形態、目的も違っているものの、そこにはともにこどもの遊び心や逞しさがあった。一方で坂上さんの「写真に写っていないところでは、泣けないくらい傷ついているかもしれない」という言葉がずしりと響いた。それでも映像からは、表現することで生きる力を少しずつ自分のものにしていくこどもたちの姿が見てとれた。どう生きるかという問いはアートとの関わりの中でよりくっきりとしたものになるのだろう。

これらのことを考え合わせると、なにも大がかりなコンサートを開くようなことだけがアートではない。それは暮らしとともにある、人々の生き延びる術であり創意工夫であり、日々の営みなのだ。

「現地に行ける人は行けばいいし、行けない人は行かなくてもいい」という関口さんの発言があった。わたしたちが今いる場所で生きること、そして生き方を問いなおすことは、現地へ行かない形での支援——という言葉が正しいかわからないし、聞きなれた言説かもしれないが——のひとつと言えるだろう。

アート、ケア、この地続きのものの根にあるのは、生きることへの問いかけだ。そこにこどもが加わることは何を意味するのか。フロアにいた片岡祐介さんは、震災のあと外で自由に遊べなくなったこどもたちにむけて、外で遊ぶのと同じくらい多彩な室内での遊びを考えている、と言っていた。そして最後の横濱さんの言葉が印象的だった。「こどものことを考えるということは被災地の未来について考えるということではないかと思います——」。

京都造形芸術大学学生の横濱千尋さん / 撮影：坂倉杏介

学会開催から 1 か月もたたない頃、野田首相は福島第 1 原発の事故は収束に至ったと発表した。さてわたしは / あの人は今この場所で、何を考え言葉にするだろう。

■日程　2011 年 11 月 25 日（金）、26 日（土）、27 日（日）
■会場　京都造形芸術大学 ギャルリ・オーブほか
■プログラム

[11 月 25 日（金）] スタディツアー
□京都府立医科大学小児医療センター・京都大学総合博物館「Inclusive Design Now 2011」展
□案内人：柊伸江（みっくすさいだー代表、京都聖母女学院短期大学非常勤講師）
　　渡邉あい子（立命館大学大学院先端総合学術研究科博士後期課程、佛教大学非常勤講師）

[11 月 26 日（土）]
□クロストーク「『こども』から考えるケアとアート——大震災を経て」
・菅野浪男（羽山の森美術館運営委員、元酪農家）
・坂上　香（映像作家、NPO 法人 out of frame 代表）
・関口怜子（ハート＆アート空間 Bel 代表）
・原坂一郎（こどもコンサルタント）
・目黒　実（九州大学特任教授、京都造形芸術大学客員教授）
・進行：本間直樹（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター准教授）
・小林傳司（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授）
・島田　誠（ギャラリー島田代表、公益財団法人神戸文化支援基金理事長）
・西村高宏（東北文化学園大学医療福祉学部准教授）
・松下弓月（福生山宝善院副住職、インターネット寺院「彼岸寺」編集長）
・横濱千尋（京都造形芸術大学映画学科俳優コース四回生）
□展示（ポスター）発表

[11 月 27 日（日）]
□総会
□プレゼンテーション
□分科会

A　"その人" に寄り添うということ——被災地でのアート活動について
・関口怜子（ハート＆アート空間 Bel 代表）
・高橋伸行（やさしい美術プロジェクトディレクター、名古屋造形大学准教授）
・聞き手：森口ゆたか（美術家、NPO 法人アーツプロジェクト代表）

B　震災と原発についてのこどもたちとの対話プロジェクト報告
・高橋　綾（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター招聘教員）
・辻　明典（大阪大学大学院文学研究科博士前期課程）
・本間直樹（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター准教授）

C　人はなぜ表現するのか？—— 内なるこどもからアートとケアを考える
・加藤ゆみ（NPO 法人こどもアート代表）
・三ツ木紀英（アートプランナー、NPO 法人芸術資源開発機構理事）
・片岡祐介（打楽器奏者、作曲家）
・ファシリテーター：水野哲雄（京都造形芸術大学芸術学部こども芸術学科教授）

D　日本ボランティア学会ジョイントセッション
いのちの萌える場所へ——原発危機から、子ども・動物・自然を考える
・菅野浪男（羽山の森美術館運営委員、元酪農家）
・大塚　愛（子ども未来・愛ネットワーク代表）
・寄田勝彦（ホース・インタープリター、NPO 法人インフォメーションセンター代表理事）
・コメンテーター：坂上　香（映像作家、NPO 法人 out of frame 代表）
・コーディネーター：原田麻以（NPO 法人こえとことばとこころの部屋東北出張所長、日本ボランティア学会運営委員）

□ワールドカフェ

■会場構成　森口ゆたか　インスタレーションタイトル「祈り」
■出展団体　女子美術大学芸術学部メディアアート学科 OMODOC、NPO 法人芸術資源開発機構、ハート & アート空間 Bel
■展示構成＋作業　京都造形芸術大学こども芸術学科 2 回生、京都造形芸術大学大学院学生有志

A “その人”に寄り添うということ——被災地でのアート活動について

薮内 都　京都造形芸術大学大学院生（芸術表現専攻情報デザイン領域）

アートを通して、被災地で支援活動を行っているハート＆アート空間 Bel 代表の関口玲子さん、やさしい美術プロジェクトディレクターの高橋伸行さんに、現地でのアートを通した支援活動について発表していただきました。

高橋さんより、被災地へ手描きの絵はがきを届ける、「ひかりはがき」プロジェクトや、仮設住宅へ震災で流された家の土台の木と思い出の品々を使用して作る、「まごころ表札」プロジェクトの内容と、被災地で暮らす人からの反応の声を聞かせていただきました。思い出を大切にし、想いの詰まった絵はがきや表札をひとりひとりに手渡しで届ける温かさを感じました。

関口さんからは、トイレットペーパーを使った二人一組になってのワークショップを提案していただきました。これは、二人でトイレットペーパーの両端を持って、トイレットペーパーがたわまないように移動するというもの。慣れてきたら、トイレットペーパーを丸めて、キャッチボールもしました。お互いの距離感やタイミングを計りながら信頼関係を構築するということを、参加者全員で体感しました。

そこから見えてきたものは、お互いの距離を保ちながら、その人、ひとりひとりに寄り添うということ。聞き手の森口ゆたかさんより、私たちのこころにある「被災者」という先入観ではなく、一個人、ひとりの人間であるという意識で震災復興に携わっていくことの大切さについてお話をいただき、ディスカッションが行われました。

私たちにできることとして、現地に「行かずに」会場である、京都からできる支援活動についても、発表者と参加者で意見を交わしました。今回の発表を受けて参加者からは、関西でできる支援活動のひとつとして、被災者の親戚や友人達にむけた、「顔の見える支援活動」に繋げていきたいという声が上がりました。その意見を元に、被災地から元気を届けるアートや展覧会を企画したいなど、積極的な意見交換が行われました。

分科会Aでは、ひとりひとりに寄り添い、距離感や信頼関係を築きながら「顔の見える」支援活動を行うことが、私たちに必要なことであると改めて気付かされる時間が共有出できたと感じています。関口さん、高橋さんの笑顔から、寄り添うことから始まる支援活動の大切さを教えていただく機会になりました。

撮影：岐美舞衣（京都造形芸術大学学生）

B 震災と原発についてのこどもたちとの対話プロジェクト報告

松永 茜　京都造形芸術大学大学院生（芸術表現専攻 ペインティング領域）

この分科会では、大阪大学の本間直樹さん、高橋綾さん、辻明典さんによる震災と原発についてのこどもたちとの対話プロジェクトについての報告をお聞きした。まず、本間さんによる「こどもの哲学」のこれまでの取り組みについての紹介、そして高橋さんによる芸術作品を対象にした小学生のこどもたちとの対話の事例の紹介、最後に辻さんによる震災と原発についてのこどもたちとの対話プロジェクトの意図の説明、また実際に高校生たちと行っている対話リレーについての現状報告、といった流れで会は進行していった。

「こどもの哲学」とは、こどもに哲学とは何か教えるものでも、こどもたちについて哲学するものでもない。こどもたちの考えや表現をこどもたちと一緒に聴き、共有し、受け止めること。そしてこどもたちから様々なことを学んでいく、それが「こどもの哲学」であり、今回の主題である震災と原発についてのこどもたちとの対話プロジェクトの出発点になっているそうだ。

また、芸術作品を対象にした小学生のこどもたちとの対話の事例について、活動の写真を見せていただきながらお聞きした。小学校の総合学習の授業の一部を使い、美術館の一室に絵画作品一点だけを展示するという環境で、こどもたちはまず自由に絵を鑑賞していく。その後、円になって座り、身ぶり手ぶりを交えて感じたことを仲間に伝えていく。一見、表現として見えなさそうなことでも表現として捉えることができるか、むしろ大人の方が問われている……という高橋さんの言葉が印象的だった。

撮影：岐美舞衣（京都造形芸術大学学生）

最後に、辻さんから9月から始まった震災と原発についてのこどもたちとの対話プロジェクトの報告を受けた。このプロジェクトは被災地に住んでいるこどもたちが語ったこと、表現したことを映像として記録、編集し、別の地域に住む同年代のこどもたちのもとへ持っていって、映像を見た後にそれについてまたこどもたちと話す、という試みだ。まず、福島県相馬市の高校生との対話の様子。高校生にされた質問は二つ。自分たちが生まれ育った町についてどう思うか、そして同年代のこどもと話せるなら何を話したいか。話される内容からは、震災から時が止まってしまった彼らの、触れれば崩れてしまいそうな思いがひしひしと伝わってきた。そしてその映像をもとに、今度は神戸の高校生との対話。阪神・淡路大震災を経験した土地だが、彼らにはその記憶はない。それでも、ゆっくり言葉を探しながら彼らの思いを語っていた。このプロジェクトはまだ始まったばかりで、これからも続けていくそうだ。

この分科会に参加された方からは、こどもたちの表現や言葉を引き出すにはどのような働きかけをすればいいか、といった質問がされた。それに対しての回答は、方法論はたくさんあるが何より大切なのは、こどもたちの声、表現を聴きその場で受け止め考えること。形式は二の次だ、ということだった。こどもと話す時、形式ばかりにとらわれてこどもの声に気付けないのでは元も子もない。この会を通して、こどもたちの話すことを大人がどう見るか、一見表現として見えないことでも表現として受け止めることができるか大人が問われているのだということ、そして、なによりもこどもたちに寄り添い続けることの大切さを強く感じた。

C 人はなぜ表現するのか？——内なるこどもからアートとケアを考える

藤松 紋　京都造形芸術大学 こども芸術学科4回生

分科会Cでは「人はなぜ表現するのか」をテーマにこどもというワードを切り口に話し合いや交流が持たれた。前半は3人のパネラーの自己紹介をした。各々のこども時代から遡り、今に至るきっかけやどのような活動を行ってきたかを話した。後半はパネラーを含め参加者からの質問や意見、感想など「なぜ表現するのか」についてのディスカッションを行った。多様な質問が出たが、ひとつめは「生活の中に美術を取り込みたいがどうすればいいのかわからない」という質問であり、今回のテーマである「表現する」ということを考えるきっかけとなった。パネラーから「まずは音楽や美術など芸術を身近に思って欲しく、自分に関係のないことと思わないで欲しい」という言葉がでた。一般的な美術というのはできる／できないという二択の世界で終わっており、とっつきにくい面がある。「表現すること」は多くの人からすると限られた人間にしかできないことのように捉えられがちだ。しかし、芸術は二択の世界ではなく様々な基準がある世界だ。答えが一つではないからこそ探りながら生活の中に少しずつ取り込んで、発見していくことが大切だ。次に話を発展させ「表現することは発散することに近いが、どういった違いがあるのか」という質問がでた。今回のテーマと「こども」という切り口で意見が飛んだ。「こどもは発散している時と表現している時の違いはない。それを見ているおとなが今どっちなのかを考えている」という意見がでた。

撮影：坂倉杏介

こどもはどちらか考えて活動をしているのではない。また、発散している時は自分に夢中で周りが見えない。発散しつくされてから初めて周りが見えて表現活動に変わっていく。こどもの発散から表現への変化をきっかけに参加者にもう一度「表現すること」とは何がきっかけなのかを問いかけていた。どんな時に「表現している」のかを考えて欲しいとパネラーから声がかかった。各々の考えを持ちながら「発散と遊びと表現は違う。人それぞれ」などの意見がでた。今回のテーマには答えはなく、参加者全員がテーマについて考えるきっかけをつかむための分科会だった。また、様々な視点、経験、感覚を分科会で意見し共有することで「アートとケア」の可能性を広げる貴重な機会だった。

D 日本ボランティア学会ジョイントセッション いのちの萌える場所へ——原発危機から、子ども・動物・自然を考える

中西祐子　京都造形芸術大学大学院生（芸術表現専攻 ペインティング領域）

今回、分科会Dに参加して、福島における日常の「人」と「自然」との繋がりの深さを改めて実感した。

東日本大震災を機に発生した原発事故には奪われた現実の中で「何ができるか」ということを強く考えさせられた。最初に話されたのは元酪農家の菅野浪男さんである。福島で震災前は酪農を営み、自然から恵みを受け、こどもたちがいる幸福な生活があったことを話された。その牧場を菅野さんは「人間育成牧場」と呼んでおられた。その牧場から恵みを得て、羊の毛からセーターを編み、チーズなど作り、自然の中に「アート」が存在するといわれた。

次にこども未来・愛ネットワーク代表である大塚愛さんも福島を愛した一人である。被災後、岡山に暮らしておられるが、福島では山上に小屋を建て、自給自足の生活をし、菅野さんのように自然を意識して暮らされていた。そしてその生活には、薪ストーブが必要であったが、それは5歳のお子さんが薪割を手伝っていたということだ。これらは都会では体験できないことであり、理想的な環境であった。

最後にNPO法人インフォメーションセンター代表理事である寄田勝彦さんが発表されたが、馬をこよなく愛する人という印象であった。被災地の馬を救助されたお話をされ、馬を思う気持ちに特に心を動かされた。この寄田さんは福島出身ではないようだが、被災地にいる動物たちへの想いを語られていた。実は福島が被災して離れた人々は、動物を連れていけず、そのまま放置されている。その動物たちを「救いたい」という熱意が、言葉から伝わってきた。

それが震災後、菅野さんは福島の美しい街並みが汚染地区として、内部に放射能漏れが続いている現実を訴えられていた。そこで育んできた牧場での生活も異常な数値で崩れ去った。また大塚さんは震災後、西に移動し、改めて福島への想いを募らせていた。そこで大塚さんは得意とするフラダンスで、福島に祈りを込めて、披露されている。その中に明るいエネルギーがあり、アートは「わくわくさせるもの」と語られていた。また寄田さんは、「逃げたくても逃げられないのが今の現実であるが、放射能は誰のせいなのだろうか。この結果を作ったのは、紛れもなく人間ではないだろうか」と強く訴えられていた。

この震災の経験を語ることは、あまりに酷すぎる現実であり、福島の自然は戻らないかもしれない。だが失われたものには、「記憶」と「祈り」がある。そのことを私たちは忘れてはいけないだろう。

撮影：岐美舞衣（京都造形芸術大学学生）

レポート
スタディツアー

ケアのなかで、アートで「ずれる」

長津結一郎 東京藝術大学大学院博士後期課程／日本学術振興会特別研究員

ひとつめの会場は、京都府立医科大学小児医療センター。京都造形芸術大学・NPO法人アーツプロジェクトとの三者共同で行う、病院の廊下や治療室の壁などに制作された多くの作品を見学した。なかでも興味深い取り組みだったのは、NICUと呼ばれる、新生児の医療現場での活動である。こどもの生き死にが関わるうえに、母親となった人々の心情や、それを取り巻く家族の想いが、無数の機械やコードにつながれながら重なり合う現場。ふと室内にある窓から廊下を見つめると、そこには大きな絵画が飾られている。家族が窓ごしに語りかける様子が、絵画とともに新生児と母親の目に映り込み、日常の張りつめた感情がわずかに「ずれる」ことで、その瞬間の記憶を刻み込む。

その後会場を京都大学総合博物館に移動し、展示「Inclusive Design Now 2011」を鑑賞。使用者とともに商品を開発していくデザインリサーチの手法を取りながら、新しい「デザイン」を生み出すプロセスについて、いくつかの事例が報告されていた。共通していたのは、現場でのニーズを「しらべ」・「みつけ」て、それに対応する新しいアイディアを検討しながら「ためす」。実際にそれを「つくる」・「つかう」ことで、新しい課題が生まれる、というサイクルを生んでいる点だ。しかしその淡々と整理されたプロセスに対して「はみ出す」試みに胸が躍る。職員のデスクのすぐ後ろに「どこでもドア」のような巨大なドアを設置し心理的な作用の調査をしたたんぽぽの家の事例など、どのように「みつけ」・「ためし」・「つくる」ことができたのか想像するだけでわくわくする。

合理的にものごとをすすめるのではなく、その時に出会うひとびとや、起こるできごとに寄り添いながら、ときに潜在化した齟齬を揺さぶること。京都で出会ったふたつの風景は、ケアの現場においていかにアートとして「ずれる」か、ということを実践としての知の立場から示唆していたように感じた。

京都府立医科大学小児医療センター

「Inclusive Design Now 2011」展

実行委員長から

水野 哲雄 京都造形芸術大学こども芸術学科教授

2011年のアートミーツケア学会の大会は、3月に発生した東北の大震災によって大きな衝撃を受けるとともに、改めて大会テーマやモチベーションが問われることとなりました。

当初から「こども」を、大会のキーワードとして準備を進めていましたが、自然災害や原発問題、さらに天災や人災も含め、家族や地域、国や社会の成り立ちの中でこどもの存在が意識されたのも確かです。こどもとかかわることは、未来とのかかわりであり、どのように歩んでいくのかが問われることとなりました。

「『こども』から考えるケアとアート――大震災を経て」というテーマタイトルに最終的に決まりましたが、議論を通じて大切にしたいと思ったことは、「『こども』から」という視点の持つ意味合いの深まりと拡がりです。クロストークとして10人を超える多くの視点が出会う機会となったことに大きな意義を感じています。また、本大会が、プレゼンテーションや分科会、会場のデザインや参加者とのふれあいを本当に大切にしての機会となったことに改めて関係者としてうれしく思いました。

全体としてテーマを活かした会場づくりや出会いの場をつくれたのではないかと感じていますが、少し気になった点は、会員の発表であるプレゼンテーションがあわただしく通り過ぎて行った感じがしたことです。発表を契機に掘り下げ深める機会の場をもっと考えられたのではないかと反省しています。実行委員として携わったものとしては、準備期間中に持った数回のミーティングが、学会との距離を縮めてくれました。また、学生たちをはじめかかわってくれた多くの人たちとの協力とつながりが大きな財産ともなったように感じています。

改めてこの場を借りて関係各位の皆さんにお礼と感謝を申し上げます。

クロストーク　撮影：坂倉杏介

展示（ポスター）発表　撮影：坂倉杏介

プレゼンテーション　撮影：岐美舞衣（京都造形芸術大学学生）

第4期新規役員紹介

■第4期　2011年10月1日～2013年9月30日
2011年度総会にて役員改選を行い、第4期役員が決定いたしました。副会長に中川 真さん、森口ゆたかさん、理事に杉林英彦さん、高橋伸行さんが新たに就任されました。4名のコメントをご紹介します。

■新規副会長

□中川 真（大阪市立大学院文学研究科教授）
大阪市立大学にてアジアの文化やアーツマネジメントを教えています。ガムラン合奏団を主宰し、障害をもつ人との共同作曲などを通して、ケアの世界と繋がっています。最近「これからのアートマネジメント」という本を出版しました。森口新副会長が活発な実践家ですので、私は研究面に目を配り、会長並びに会員の皆さんのサポートができたらと思っています。本学会は素晴らしい人材の宝庫です。新たな職務にワクワクしております。

□森口ゆたか（美術家、NPO法人アーツプロジェクト代表）
この度副会長に任命されましたNPO法人アーツプロジェクト代表の森口ゆたかです。学会というところにすら不慣れな私が、学会内に数多くいらっしゃる高名な先生方を差し置いてこのような大任を仰せつかり、身の縮むような思いです。鷲田先生が学会創設時におっしゃった「学会らしからぬ学会を目指す」という点が、今回の任命に繋がったのかも知れません。しっかりと勉強させていただきたいと思います。どうか宜しくお願い申し上げます。

■新規理事

□杉林英彦（愛媛大学教育学部講師）
愛媛大学教育学部で美術教育を担当（講師）しています。本学会では編集委員として参加させていただきながら、興味深い実践や優秀な研究論文から多くのことを勉強させていただいております。私の専門領域は学校教育における美術教育がその範囲になるのですが、美術教育、教育の本質を問い直す機会を本学会から得ています。平成24年度に愛媛大学で本学会を開催させていただくことになり、事務局のお力添えをいただきながら、役割を果たしていきたいと思います。

□高橋伸行（アーティスト／やさしい美術プロジェクトディレクター）
このたび理事に就くことになりました高橋伸行と申します。愛知県名古屋市を拠点に「やさしい美術プロジェクト」という取り組みを主宰しています。主に病院にてアートプロジェクトを展開していますが、最近は病院のみならず発達センターちよだでのワークショップや、国立ハンセン病療養所大島青松園ではギャラリーとカフェを運営しています。皆様の交流と共有の場が広がるよう努めてまいります。どうぞ、よろしくお願いいたします。

アートミーツケア学会　入会のご案内

会員を募集しています

人間の生命、ケアにおけるアートの役割を研究する場として、またアートの力を社会にいかしていくためのネットワークとして、2006年に設立しました。アートミーツケア学会では、趣旨に賛同する会員による活動基盤をつくりたいと考えています。多くのみなさまに賛同、支援をいただき、学会を支えていただけることを願います。ぜひ、入会し、研究や活動にご参加ください。

事業案内

1. 大会の開催
講演、研究発表、実践報告を実施し、学会員による発表、討論の場を設けるとともに、会員相互の情報交換、交流の場として年1回大会を開催します。

2. 調査研究の推進
「医療とアート」「高齢者とアート」「障害と創造性」「アート・テクノロジー・ケア」など、アートとケアに関する調査研究を推進します。

3. 学会誌の発行
アートとケアに関する研究論文や調査報告、実践紹介、エッセイ、評論などを掲載した学会誌を発行します。

4. ニュースレターの発行
日本や海外における新しい情報を掲載したニュースレターを発行します。

5. フォーラム、シンポジウムの開催
特定のテーマ、タイムリーな課題についてのフォーラムやシンポジウムを開催します。

6. プログラムの開発、プロジェクトの実施
ケアの現場へのアーティストの派遣、アート作品の導入、プログラムの開発などを推進します。

7. 国際交流の推進
アートとケアに携わる団体と共同研究を実施します。また、情報交換、交流事業を実施し、アートとケアに関わる国際的なネットワークの形成をめざします。

申し込み方法

1. 郵便振替にて年会費をご入金ください。
入金先　アートミーツケア学会
口座番号　00920-4-252135

2. ご住所、電話番号、お名前、会員を記入のうえ、年会費の払込票（コピー可）をそえて事務局までお送りください。

3. 事務局より入会手続き完了のお知らせを返送いたします。

会員種類・年会費

□個人会員　一般 10,000 円　学生 5,000 円
□賛助会員　30,000 円

役　員（敬称略）

□会長　鷲田清一（大谷大学教授）
□副会長　中川　真（大阪市立大学大学院文学研究科教授）
副会長　森口ゆたか（美術家、NPO 法人アーツプロジェクト代表）
□常務理事　播磨靖夫（財団法人たんぽぽの家理事長）
□理事　秋田光彦（浄土宗大蓮寺・應典院住職）
理事　坂倉杏介（慶應義塾大学グローバルセキュリティ研究所特任講師）
理事　塩瀬隆之（京都大学総合博物館准教授）
理事　志賀玲子（舞台芸術プロデューサー、ALS-D プロジェクト）
理事　杉林英彦（愛媛大学教育学部講師）
理事　鈴木理恵子（女子美術大学非常勤講師）
理事　関口怜子（ハート＆アート空間ビーアイ代表）
理事　ダーリング・ブルース（美術史家）
理事　高橋伸行（アーティスト／やさしい美術プロジェクトディレクター）
理事　銅金裕司（メディアアーティスト、京都造形芸術大学教授）
理事　並河恵美子（NPO 法人芸術資源開発機構代表）
理事　野津　亮（大阪府立大学助教）
理事　畑　祥雄（関西学院大学教授）
理事　日野陽子（香川大学教育学部准教授）
理事　本間直樹（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター／文学研究科准教授）
理事　的場政樹（医療法人直志会袋田病院院長）
理事　水野哲雄（京都造形芸術大学子ども芸術学科教授）
理事　見寺貞子（神戸芸術工科大学教授）
理事　三輪敬之（早稲田大学創造理工学部教授）
理事　山口悦子（大阪市立大学医学部附属病院安全管理対策室専任医師）
理事　横川善正（金沢美術工芸大学教授）
□監事　太田好泰（エイブル・アート・ジャパン事務局長）
監事　柊　伸江（みっくすさいだー代表、京都聖母女学院短期大学非常勤講師）

編集後記

●大会会場のギャルリ・オープではヤノベケンジさんのジャイアント・トらやんの前に、たくさんの白い風船が。絵本をきりとったような風景のなかで、あたたかい時間を過ごさせていただきました。来年は愛媛・松山での大会です。温泉を楽しみにいらしてください！（森下静香）

●出会ったことのないものに出会った瞬間の衝動はとても強く、刹那です。しかし衝動が強いほど、そこから生まれる創造力は永く続くだろうと思います。大会では多くの出会いを見、体験しました。それらが色々な場で育まれ、大きな創造力となることを願っています。（大久保）

●2011年度大会を開催いたしました。プレゼンテーションや展示（ポスター）発表は、ご応募くださった方も多く、全国各地での活動や研究のひろがりを改めて感じる機会となりました。ご参加、ご協力くださったみなさま、どうもありがとうございました。（井尻）

アートミーツケア学会ニュースレター
Vol.9　2012年2月10日発行
発行　アートミーツケア学会　http://popo.or.jp/artmeetscare/
〒630-8044 奈良市六条西 3-25-4　財団法人たんぽぽの家内
Tel.0742-43-7055　Fax.0742-49-5501　E-mail.art-care@popo.or.jp